

1866年のフランス「農業アンケート」のアルザス篇

湯村, 武人

<https://doi.org/10.15017/4474802>

出版情報：経済學研究. 44 (2/3), pp.151-168, 1979-04-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



1866年のフランス「農業アンケート」のアルザス篇

湯 村 武 人

訳者による解題

フランス政府（農業、商業、公共事業省）による1866年の「農業アンケート」（Ministère de l'Agriculture, du Commerce et des Travaux Publics: Enquête Agricole）は、19世紀フランス農村史の研究を志す者にとって、最も重要な資料の1つである。ただし、その詳細な説明は、既に本誌第43巻第4号所載の論文「19世紀フランス農村における年雇労働力について」の中で済ませておいたので、ここで再び繰り返すことは止める。

以下に訳出するのは、この「農業アンケート」のアルザス篇（Deuxième Série. Enquêtes Départementales. 13^e Circonscription. Bas-Rhin—Haut-Rhin.）である。しかし、このアルザス篇は、他の諸地方の報告書とは違って、なにぶんB4版で250頁余の大冊であり、紙幅の限られていることで、その全文を訳出することは出来ない。したがって、以下はその抄訳である。省略した部分は……〔 〕……の記号で示しておいた。

さらにまた、このアルザス篇は2部からなっており、他の諸地方の報告書に相当する部分である第2部の前に、このアンケートのアルザス地方区（第13区）総裁であるウージェーヌ・ティスラン氏の判断による独自の報告書部分が、第1部として添えられている。しかも、この部分はその大きさが約130ページもある大部なものである上に、内容的にも極めて興味深いものである。したがって、以下の訳文は、むしろ主として、この部分からの抜粋ということになった。

アルザス農業は、フランドル農業と共に、ヨーロッパ近代農業の発達史上に極めて重要な役割を演じた。このことはB・H・スリッヘル・ファン・パート著、

速水融訳、『西ヨーロッパ農業発達史』（日本評論社、1969）からの次のような引用によっても、明らかであろう。同書第三部第D節「近世の農業と農村」の一節は、次のように述べている。

「農業がすでに非常に集約的で高度に発展していた地方があった。フランドルやブラバントは、このもっともよい例である。……フランドルとブラバントで学ばれたことは、主としてイングランド東部の、自然的土壌の質は劣るが、新方法が好結果を生ずるノーフォーク、サフォーク、およびエセックスの諸州で実行された。新農業はイングランドから著書や印刷物によって、世界を征服した。

西ヨーロッパには、農業がかなりの高水準に達した他の地方もあった。たとえばドイツでは、パラティナート、ラインラント、バーデン、ナッサウ、エルフルト、ウエルトブルグ、およびアウグスブルクの都市周辺の農村がそうであった。フランスの農業は全体として発展が遅れていたが、例外として、フランス領フランドルと、アルトワの国境諸州があり、ここでは、これに接する南ネーデルラントの諸地方と同じ程度の発展をとげ、17世紀後半まで1つの地帯を形成していた。農業的見地よりみれば、アルザスはパラティナートやバーデンと一体であり、農業は高度の発展段階に達していた。」（p. 303～4）

以下の訳業は、主としてこうした視角からみて重要と判断される個所を選んで行なった。なお、注として原注のほかに訳注を加え、それぞれに明示しておいた。

—————× × ×—————

農業・商業・公共事業省
農業アンケート

第2系列. 県別アンケート

第13区. バー・ラン県及びオー・ラン県

(III) 気 候

……〔前文省略〕……

第 一 部

(I) アルザス農業状況概観

……〔全文省略〕……

(II) 土 地

……〔前文省略〕……

地理的位置. —アルザスは、わが国の北東部国境の最も突出した角を形成する。その北の境界はパリと殆んど同緯度上にある。南は、オー・ラン県の最南端は、ディジョン、ツール、及びアンジェルの緯度の線にまで出張っている。このライン河沿いの2つの県は、したがって、パリとの比較では南にあたり、その東方に約500キロメートル隔った位置を占めている。それは、フランスの北東部地方の一部をなしている。それは、帝国を洗っている海から最も遠く隔った県であり、ドイツ、ボヘミア、ハンガリー、低地オーストリア、及びダニューヴ河諸地方に最も近接した県である。^(訳注1) 両県は、西にあるヴォージュの鳥冠と、東にあってバーデン大公国からそれを分離しているライン河とに挟まれて、位置を占めている。南は、ジュラ山脈とスイス国によって限られている。北は、ラウテル川がドイツのファルツ地方との間のその境界を形成している。

面積. —その面積は8,648平方キロメートルであり、両県によって殆んど半々ずつ占められている。それは、ドイツの黒林山脈とフランスのヴォージュ山脈とに挟まれた美しく豊かな河谷の一部をなしており、その中央には、中世ドイツの恋愛詩人によってあれほどしばしば歌われた河が、紆余曲折しながら流れている。

山岳誌. ……〔全文省略〕……

アルザス平原の気候は、温和ではあるが変化に富んでいる。年間の平均気温は、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ドレスデン、プラグ、及びクリミヤにおけると同じであるが、同じ緯度下にあるフランスの他のどの部分よりも多く大陸性気候の性格を呈する。夏の気温はより高く、冬の寒さはより激しい。たとえば、6, 7, 8の3カ月間には、平均気温は摂氏18度である。それは、春と秋には10度であるが、冬の3カ月間の平均は1度3分に下る。気象図の検討によって確認できるように、同一の日内、同一の月内における気温の変化も著しい。

アルザス平原の気候について指摘されねばならない1つの重要な事実は、年間の大部分の期間における高い気温の持続である。月間平均の数値だけを考察すると、4月の初めから11月1日まで、気温は年間平均を上廻っている。4月と10月は殆んど年間平均に等しい。5, 6, 7, 8, 9の諸月、すなわち150日間は、15ないし19度の気温である。11月1日から4月1日まで、気温は著しく低下する。それは0度5分から5度5分の間である。

太陽熱のこうした配分と、夏の諸月の期間アルザスを支配している高温とが、大量の熱量を一定期間にわたって必要とするある種の植物が、年間の平均気温はライン河谷のそれに等しいか、ないしはそれを上廻ってさえいる地方でもその栽培に成功していないのに、アルザスでは完全に繁栄している理由を説明する。バー・ラン及びオー・ランの両県が豊かなぶどう園を所有し、畑にはトウモロコシを栽培することが出来、その道路や住居を見事な栗の木、沢山実のなるクルミの木、及び明らかにモット南の地方の植物であるその他の小灌木の木蔭で蔽うことが出来るのは、この地方の夏の暑さの故である。

こうした例外的な気候は、一方では、アルザスは海から遠く隔っているために大洋の鎮静的な影響をうけ

(訳注1) ヴォージュ山脈の峻しさをこのように形容したのである。

ないということに、そして他方では、(そしてこれが主要な理由だが)、ライン河谷の構造に由来している。事実、ヴォージュ山脈の大きな連鎖がこの地方を西風から庇護している。他方、黒林山脈の山々が東風からこの地方を保護している。アルザス平原が庇護物を欠いており、大気の運動にさらされているのは、南西部では、ジュラ山脈の末端の諸丘陵とヴォージュ山塊との間、そして北部では、ヴォージュ山脈と黒林山脈との間だけである。

わがライン河沿岸の両県は、かくして、比較的狭い幅の2つの場所を除いて、あらゆる方面から完全に庇護されている。太陽の光線は、両側の迫ったすべての河谷でそうであるように、そこに集中して著しく気温を高める。そこでは西風も東風も殆んど全く感じられず、ただ北風と南風だけが支配するという理由も、またその点に由来する。次には南西の風が最も頻繁である。この風は、サハラ砂漠の焼けつくような地表で形成され、渦巻きながら地中海を越えてヨーロッパに吹いてくる熱い空気の大きな流れに属する。サハラからの流れは、ローヌ河の、ついでソーヌ河の流れる河谷を真直に上ってきた後、フォーシユ山群に停止させられて右に曲る。そして、マズヴォーの近くで、ヴォージュ山脈とジュラ山脈との間に空いたままになっている隙間を見付けてアルザスに侵入し、対角線を辿ったあと、パー・ラン県の北東の角に位置する抜穴を通じて、アルザスから抜け出て行く。この風は、ライン盆地への侵入にあたって、既にその勢力の一部とその人をいらだたせるような特性とを失ってはいるが、なお、この地方の気候に作用を与えるのに充分なだけの熱気を保持している。さらにこの風は、海を渡っているうちに身につけた水蒸気を、全面的には奪い取られていない。かくして、この風の吹く時には、冬には急激な解氷がひきおこされ、夏には雨が齎られる。この風がこの後者の季節に形成する雲が、太陽の熱気を和らげる。

北極からの大きな流れから派生した北風と北東風とは、それとは全く反対の方向を辿り、全く逆のふうに

作用する。それらの風は、冬は寒冷で極度に乾燥しているので、気圧計を押し上げたり、寒暖計を時には零下15ないし18度にまでも押し下げたりする。これに反して、夏に晴天が極めて長く持続するのもそのお蔭である。乾燥がこの風の支配している時期に到来する。そして最後に、散らばって天を遮っていた雲が、この風によって追い払われ、太陽はその恩恵的な光線で、丘の斜面の葉の茂ったぶどうの枝や、平原の稔りつつある収穫物を金色に彩る。

この風の優れた作用は6月には止み、9月末にならないと回復しない。この風以上に南西の風が吹き、夏の間、ヨリ頻繁に且つヨリ豊富に雨を降らせ、アルザスを夏雨地方の仲間に加わらせる。そしてそのことから、穀物の開花、成熟、収穫はやっとかっとなしか果されないというのに、ぶどうの収穫は殆んど常に恵まれているという結果になる。……〔以下省略〕……

(IV) 作物

……〔前文省略〕……

牧畜。——アルザス農業の特徴の1つは、未開の状態(à l'état inculte)の地面を残していないということである。1片の地片といえども開発されていないものはないし、でこぼこの岩山でも樹の植えられていないものはない。道路は狭く、容易に往来するのに必要なだけの幅に節約されている。溝や細道には芝が植えられており、まぎれもない小牧場をなしている。どこでも、念入りな耕作のしるしが見出される。この国を横切るすべての旅行者が感銘をうけるのはそのことである。統計に landes とか pâtis とかいう名前で計上されているものも、必ず、年間のある期間、若干数の家畜に食物を提供する放牧地(pâturages)である。これらの放牧地の3/4、いや4/5さえもが、ヴォージュ山脈の、山頂や最も高い諸河谷の上のほうの部分やからなっている。その中には、1,000メートルから1,400メートルまでの高度をもち、年間の平均気温は4ないし5度を超えず、滝のように降る雨量が厚さ1メートル以上もの瀑布によって代表されているよう

な、円形の山嶺や峰々が含まれている。これらの放牧地は、そのミルクが若干の評判を得ているチーズ（ムンステルやグリュイエールのチーズ）の製造に使われる牝牛の群によって、6月から9月にかけて、数世紀以前から利用されてきた。河谷の放牧地の場合には、芳香性の植物はより少くしか生えず、動物たちはそこにより豊富な牧草を見出す。こうした放牧地は、かなり稀には未墾地、荒地、小石のゴロゴロしている地面によって所々で中断されているが、数年以前から植林によってその消滅に努力されている。

平原部にはまた、沼沢性ないし泥炭質の地面や、砂や小石のある岸辺やによって構成されている、ある程度の広がりをもった放牧地が存在する。家畜たちに極めて貧弱な食物をしか提供してくれないこうした放牧地（pâturages）は、きわめて人口稠密なこの国の只中に汚点を作っているが、この種の放牧地がすべて共有の地面であることは、殆んど注意を払わないでも確められる。事実、久しい以前から、個人の所有者たちは、その所有地から不毛の部分を消滅させた。そして、アルザスの耕作者を特徴づけているエネルギーや辛抱強さについて考える時、それほど立派な資質が共同体の精神によって麻痺せしめられ、個人の創意に委ねられるなら肥沃な灌漑された牧草地（prairies）に変えることが出来るような地面を、不毛な砂地の状態に放置されているのを見るのは、痛ましいことである。既にシュヴェルツ（Schwertz）が、シレストット及びストラスプールの両郡内に存在する広大な不毛の土地を見て、今世紀の初めにこの事実で愕然とし、憚ることなくその驚きを、いやその怒りをささぶちまけている。けれども、取り急いで述べねばならぬが、シュヴェルツの非難は、今日ではもはや当時と同じような価値をもっていない。このドイツの農学者に見出された25,000ヘクタールの不毛の共有地は、殆んど姿を消した。それは、山岳部の放牧地を含めても、辛うじて8,000ヘクタールしか残されていない。

……〔以下数行省略〕……

オー・ラン県の pâtures, pâtis, 及び landes の面

積は、今日では18,000ヘクタールから20,000ヘクタールの間である筈である。バー・ラン県のそれに較べるとより大きいこうした広さは、ヴォージュ山脈の、最も高い、最も深く切抜かれた、最も幅の広い部分がオー・ラン県内に位置していることや、放牧地は、森林地帯よりも上、高度800メートルから1,000メートルの高さのところであって、ヴォージュ山脈の峰々や広大な軽気球群（訳注2）の全部を占めていることを想い出すなら、驚くに当らない。けれども、こうした山岳部の放牧地は未開地であるということ——実際はそうではない、なぜなら、そのうちの若干は極めて生産的なものだから——を認めてさえも、それでもなお未開地の割合は、アルザスでは、フランスの全県の平均のそれに較べて、またイギリスにおけるそれに較べて、大幅に小さい。アルザスの優秀さは、この点に関して、スコットランドに較べても、やはり極めて大きい。なぜなら、生産的面積は、わがライン河沿いの両県では、総面積の94ないし95%という数字に達するからである。未開地、道路敷地、運河、河川、池沼、鉦山、家屋、等々は地域の5ないし6%以上を占めない。不生産的面積は4.24%である。ところがイギリスでは、そしてとりわけスコットランドでは、それは、ずっとずっと大きい数（2倍以上）に達する。

森林。——生産的面積は森林地と農用地とからなる。前者は領域の著しい部分を占める。それは300,000ヘクタール以下ではないものを擁する。それは、アルザスの領域の1/3にあたる。……〔以下省略〕……

ぶどう園。——農業（放牧地を除外した）によって経営されている地面は、総計514,000ヘクタールの面積を占める。すなわち、バー・ラン県に278,000、つまり県の総面積の61%、オー・ラン県に237,000、つまり県の総面積の約58%。

ぶどうはヴォージュ山脈を東に向けて越える時、まず人目を惹きつける第一の作物である。それは25,000ないし26,000ヘクタールの面積を占めている。この

（訳注2） 山頂が円い形をしたこの地方特有の山を軽気球（ballon）と呼んでいるのである。

地方の作物でこれ以上に見事なものはないし、またこれ以上に行き届いた世話をうけるものはない。ぶどう苗の選択がこの地方におけるよりも優れていることはありうるし、刈込みはもっと改良された方法でなされるし、ぶどう酒がもっと上質であることはありうるだろう。しかし、この地方における以上の小綺麗さと風情をもって管理され、この地方以上にすぐれた道路をもち、この地方以上の生産量をあげているぶどう園は、他の何処にも見当たらない。1ヘクタール当りのぶどう酒生産量を80ないし100ヘクトリットルとして計算すると、粗収益は1,000ないし1,500フランと見積られ、8,000、10,000、12,000、15,000ないし20,000フランにのぼる投下資本に対して8ないし9%の利益をもたらすことになる。イギリスやザクセンはこれに比肩するものを何も有たない。なぜなら、ケントの有名なホップ畑にはアグノウのそれを配置できるのだから。

この貴重な樹はこの州では常に大変に尊重されており、この州の富の主要な源泉の1つをなしていることが理解できよう。それは、ローマの支配下にあったこの州に16世紀以上も以前に導入され、以来絶えず、アルザスの耕作者の注意をひきつけてきた。古い年代記はメロヴィング朝の王やその扈從たちの食卓を飾るものとしてぶどう酒について述べている。シャルルマーニュの資財帳には、この強力な皇帝がライン河のすべての岸に所有していたぶどう樹に対する大きな心尽しを証拠だてる幾つもの訓令が含まれている。その評判とその製品の流通の容易さとお蔭で、アルザスのぶどう園は、古い時期から大きな発達をとげていたに違いない。ぶどう樹は、今日のそれより広い面積をその黄金の房で飾るに到っていたとさえ思われる。こうした事実の中に、若干の人々が主張したように気候の寒冷化の結果を認めることはできない。こうした変化は、当然に、経済的諸条件にもたらされた諸変化の影響の下に生じた。鉄道の発達が、南部フランスのぶどう酒を市場に溢れさせてその相場を下落させ、その結果として、質の悪いぶどう樹を取り除かせたのであ

る。優れた産地だけが生き残り、消費の諸中心地がそのことの接近を容易にすればするだけ、それだけ益々発達した。

平原部のぶどう園は、不確かな、質の悪い製品しか生産できないので、ロレーヌ地方や南部フランスの製品との競争の前に、大部分が姿を消した。丘陵部は、それに反して、特別の、きわめてもてはやされる芳香を与えてくれるその土質のお蔭で、その斜面が新規のぶどう樹の枝々で蔽われるのをみた。したがって、衰退があったのではないことがわかるだろう。なぜなら、ぶどうは収益をもたらすような産物を産出するような地区にだけ地域を特化したのだから。それどころか発達があったのであって、ただ単に土壤や気候によるだけでなく、それぞれの時代の市場の需要によっても栽培の特殊化を要請する、自然的・経済的法則に順応することは、耕作者の聡明さの最大の証拠である。……〔以下省略〕……

穀物、飼料、および工業用作物。——耕地と牧草地が両県の半分をやや上廻る面積を占めている。それは(原注1)パー・ラン県の面積の57%、(原注2)オー・ラン県のその54.6%を擁している。アルザスは、その栽培する植物の数と多様さで有名である。その農業は古くから繁栄しており、最も評判の良い作物に富むに至った。この美しい州は、その位置のお蔭で、その国土とその資源の上にすべての君主たちの関心をひきつけた。われわれは、ローマ人がこの国に認めていた長所については既に語った。この国は、フランク族の支配下であったし、メロヴィング朝の諸王の気に入りの滞在地であったし、諸々の年代記が、彼らがそのアルザスの所領やぶどう園に払っていた関心について述べている。シャルルマーニュは、その先任者たちと同様に、そこに多数の農場を所有していたし、勝利をあげた幾度もの遠隔地への遠征や政務の余暇に、一度ならずこの地を訪れた。資財帳は、われわれに、この強力な皇帝がそのライン河沿いの所有地に栽培されていた植物について記述している、貴重でもあり興味もあるリストを残してくれている。このリストは、僅かの例外を除いて

て、今日フランスのこの部分で見出されるすべての穀物と野菜とを包含している。それは、小麦、ライ麦、大麦及び燕麦、そらまめ類、扁豆類、えんどう類、隠元豆類、キャベツ、アメリカ防風、大麻及び亜麻、けし、なたね、ちょうせんあざみ、芥子菜、である。…

トウモロコシがこの地方に姿を現わしたのは1540年にであった。ホップはそれに僅かの年次遅れて這入りこむ。馬鈴薯は、既に1590年に記述され絵に描かれているが、すべての秀れた事物が一般にそうであるように、緩慢であると同時に困難な普及の仕方をした。この貴重な根塊は、この地方の住民の食料の基礎となる筈のものであるが、1796年以降にならないと普及しない。タバコは1620年に栽培され始め、既に17世紀末には、アルザスは、一般の消費に250万キログラムのタバコを供給している。1718年には、この作物の産出量は400万に達したし、ストラスプールだけに8,000人の労働者を擁する72のタバコ製造所が数えられた。

(原注1) および(原注2) 最も新しい資料によると、パー・ラン県及びオー・ラン県の土地は次のように配分されている。

土地種別	パー・ラン県	
	(ヘクタール)	(%)
耕作地	195,330	42.93
自然牧場及び果樹園	63,999	14.07
ぶどう園	13,368	2.94
放牧地	12,157	2.67
森林及び林地	149,080	32.75
建物、道路、運河、河川など	21,100	4.64
	455,034	100.00
土地種別	オー・ラン県	
	(ヘクタール)	(%)
耕作地	163,759	39.75
自然牧場及び果樹園	61,482	14.92
ぶどう園	11,800	2.87
放牧地	23,300	5.65
森林及び林地	138,584	33.65
建物、道路、運河、河川など	12,934	3.14
	411,859	100.00

カール五世は、また、アルザス農業に1つの恩恵を与えようとした。彼はみずから最初のあかねの苗をこのライン河の岸辺に持ち込み、その栽培を奨励してオランダ製品と競争させた。その成功振りは、1778年に、この染色用の植物の根の年当り生産量は2,500万キログラムにのぼった程である。

最後に、1775年には、既に16世紀に導入されていたクローバ、むらさきうまごやし、及びたてやまおうぎという、最も貴重な飼料用の作物が、当時はフランスの他の地方ではまだ殆んど知られていなかったが、アルザスの諸農場の休閑地では、重要な役割を演じていた。

こうした新しい作物の導入のお蔭で、また、フランスにもドイツにもそれほど続出して現れたすべての君主たちの奨励のお蔭で、そしてとりわけ、耕作者たちがライン河に沿った国々の提供する市場に常に見出した利便のお蔭で、アルザスの農業は、改良された農業、ないしはモット適切には、工業的農業の性格を古くから帯びるに至っていた。この地方が、この世紀の初めには、すべての隣接県に対してきわめて大きな進歩性を持っていたのは、例外的に有利なこうした諸状況のお蔭によるものである。この進歩性に対して、それらすべての隣接諸県は、その生産物の流通のための同じような容易さと同じような市場とをその手の届くところに持てるようになった時以降、それを消滅させるように努力している。

その経営様式を変え、それを経済的諸条件とそれぞれの時代の諸必要とに適應させるのが、合理的農業の特性である。それは、そうした意味において、終始現在の状況に則応するために社会それ自体が変るのに応じて変化しなければならない人間的諸制度と、同じような身の処し方をする。かくしてアルザスは、シュヴェルツ(Schwartz)が既にこの世紀の初めに記述したこの美しく強力な農業に到達する以前に、北アメリカの諸種族の中に今なお見出せるような半野蛮な経営様式に始まって、最も文明化した諸国に行なわれている工業作物を伴った集約的耕作制度に至るまでの、人

1866年のフランス「農業アンケート」のアルザス篇

作物名	パー・ラン県		オー・ラン県	
	面積 (ヘクタール)	%	面積 (ヘクタール)	%
小麦	60,259	13.24	38,468	9.34
メテユ小麦	3,741	0.82	7,285	1.77
ライ小麦	7,805	1.72	17,858	4.34
大麦	26,213	5.76	23,013	5.59
トウモロコシ	1,709	0.37	1,192	0.29
えんどう・隠元・扁豆	3,649	0.80	767	0.19
その他雑穀	2,497	} 0.55	1,080	0.26
そば	4		733	0.18
馬鈴薯	34,102	7.49	22,868	5.55
燕麥	13,036	2.86	9,893	2.40
採油作物	6,500	1.43	3,017	0.73
繊維作物	3,900	0.86	1,268	0.31
タバコ	4,800	1.05	389	0.10
ホップ	1,200	0.26	99	0.02
染料作物	600	0.13	—	—
きくぢしゃ・芥子菜	450	0.10	—	—
甜菜	3,550	0.78	} 6,278	} 1.53
キャベツ・かぶ	2,000	0.45		
栽培牧草地	16,965	3.75	15,000	3.64
自然牧草地	58,739	12.91	55,682	13.52
休閑地	—	—	10,880	2.64
園地	2,350	0.51	3,665	0.89
果樹園	5,260	1.16	5,800	1.40

1. オー・ラン県における作物の分布の現状に関しては正確な資料が欠けている。1862年に作成された統計の未公開資料はこの県については不正確である。表に掲げられている数字は正確と認めうるに充分な程度に真実に近い。けれども、工業用作物は、今日、おそらくは、両県においてはここに述べられているものよりずっと大きい面積を占めるであろう。
2. あかねは、オー・ラン県ではタバコに合算されている。
3. 休閑地は大部分が秣用に利用されている。固有の意味での休閑は僅かである。

口の増加につれて段々に並び次々に受継がれている一切の制度を、経過せねばならなかった。けれども、牧畜や焼畑農業の時代にまでは溯らなくても、ローマ人による占領の初期の時代には、1年の耕作に対して1年の、及びしばしば2年の休閑を伴った二圃式農業が、アルザスを支配していたようである。この種の農業は、シャルルマーニュの強力な手が農業に新しい飛躍を刻印する時代まで存続していた。外部の市場の拡大と同時に増大する地域内の人口の必要が、アルザスの耕作者たちを、休閑地の面積を狭め、1年の休息のあと2回の収穫をあげるように導いていった。この制度は長期間存続した。そして、裸の休閑地が消滅し始

めるのは、殆んど今世紀の初めになってからである。今日では耕地は、アルザスでは、プリニウスやカトーやコルメルラのような古代の権威者たちが勧めていたような伝統的な休閑地を、もはや持っていない。休閑地はもはや名称としてしか存在しない。それが占めていた空間は、飼料用作物、馬鈴薯、甜菜によって占められている。土地は、年々歳々、自由な仕方で施肥され、たっぷり収穫を与える。アルザスの耕作者は、その土壌の諸資質とその気候とを利用して、同じ年の中に2回の収穫を求めるとさえ稀ではない。最も肥沃な地区では、三圃制度は輪作 (la culture alterne) によって取って替られている。かくして、一方では小

麦と大麦とが、他方ではタバコ、なたね、けし、及び亜麻が、同じ畑に次から次に絶え間なしに栽培される。劣等地や劣等地方の穀物は、もはやアルザスには存在しない。パー・ラン県には、もはやそばは見出されないし、ライ麦は面積の極めて僅かな部分しか占めていない。他方で小麦、大麦、及び工業用作物は、そこに大きな面積を占めているというのに。

前頁の表は、両県の多種多様な作物の配分を示す。

見得るように、両県は同じような発達をとげていない。パー・ラン県のほうが大幅にオー・ラン県より進んでいる。ただ単に工業用作物がこの後のほうの県、すなわちオー・ラン県では、前者すなわちパー・ラン県に較べると狭い面積しか占めていないだけでなく、また、ただ単に優良穀物の占める面積がヨリ狭いだけでなく、小麦、大麦、燕麦、およびトウモロコシの単位面積当りの生産量も低く、同じく穀粒の大きさが劣り、ヨリ少ない粉をしかもたらさない。ぶどうだけが例外である。土地の生産性及び穀粒の質におけるこうした違いは、高度の違いと、作業のやり方の優劣に関係するのだろうか？ こうした条件は疑いもなく何らかの影響を及ぼしうが、それは決して支配的な原因をなすものではない。差異はとりわけ、そして何よりも、土地への施肥に由来する。事実、パー・ラン県がきわめて大量の肥料を輸入するのを見て驚かされるが、他方でオー・ラン県の農業者たちは、その土地の肥沃性を改善することの出来る物質を蒐集すること

ヘクタール当り生産量(キロリットル) (種子分控除)

作物名	パー・ラン県	オー・ラン県
小麦	21	19~20
メテユ麦	19	18
ライ麦	20	20
大麦	29	27
そば	22	15
トウモロコシ	21	15
燕麦	31	30
そらまめ、隠元豆、えんどう	20	14
馬鈴薯	180	120
甜菜(キログラム)	30,000	25,000

に、いわば関心をもっていない。彼らはその飼育している家畜の産み出す堆肥で満足している。都市で作られるものを買うところか、それをローヌ河やライン河を利用してパー・ラン県に奪われるがままになっている。ところで、土壌から沢山のものを奪い取る、うるさ型の、集約的な作物を栽培するには、輸出された農産物によって奪い取られた肥沃性を償うために、沢山の肥料の持ち込みが必要である。農場で出来る肥料ではもはや充分ではない。なぜなら、そこにはもはや補償はないわけだし、土地から奪われた肥沃な諸成分と農場で出来る堆肥によって回復されるものとの間には、均衡はもはや存在しないからである。そこで、肥料を外部に求め、それを地中に蓄積することが不可欠になるし、それを怠れば、土地は瘠せ、生産性と穀粒の質は減少することになる。パー・ラン県は、同県がその工業用作物の発達を、すなわち、アルザス農業の栄光でありその繁栄の主要源泉の1つである作物の発達を負うのもまた、その同じ理由にである。アルザスは、わが国の北部地方の諸県に普及した近代的諸工業を導入することを狙わなかった。それは、甜菜による製糖工場や蒸溜工場を設立しなかった。それは、それが既にもっていたもの、それが既に知っていたものを改良した。そしてそれは、幅広い選択が出来た。なぜならそれは、あかね、けし、なたね、亜麻、大麻、タバコ、ホップを持っていたからである。その耕作を市場の需要と労働力の状態とに常に適応させることによって、耕作者は、最近数年間、とりわけホップ畑を拡げること没頭しており、他方では、多量の労働力を必要とするあかねの栽培面積を減らしている。この地方のタバコ、けし、等の豊かな栽培以上に見事なもの、それ以上に手入れの行き届いているものは何もない。アルザス人の我慢強い、不撓不屈の活動性は、その生産性を増加させるのに適した手段の探求に疲れを知らない。そして、それらの作物からの収益は1つの充分に大きな励ましである。事実、一体何をそれに比肩しえよう。けし、なたね、たまなずなは、ヘクタール当り平均500ないし600フランの生産物をもたら

す。大麻と亜麻は平均1,600フランの価値をもつ19キントルの麻の束を産出し、タバコは、一般に1,200ないし1,300フランの価値をもつ1,800ないし2,000キログラムの乾燥葉を年毎に産み出す。あかねからの上り高はその倍である。ホップ畑はもっとも大きい収益をもたらす。なぜなら、ヘクタール当りの平均産出高は2,660フランという数字に達し、それは1,000ないし1,200フランの利益になるし、この利益額は時としてヘクタール当り2,000フランに上ることがあるからである。これらの見事で豊かな作物の大部分は、ただ単に、最も優れた牧草地のそれより3倍、4倍、5倍、そして6倍もの収益を与えるだけでなく、さらに、より豊富な穀物の収穫を産み出すように土地を準備するし、そのうえに、ヘクタール当り500, 600, ないしは700フランにも達しうのような、著しく大きな労賃額を労働者たちに渡してくれる。それはまた、労働力による作業を年間を通じて殆んど均等に使用し、その月毎に平等な配分を行うことを可能にする。最後にそれは、収益の源泉にバラエティをもたらせることによって、唯一の作物の成功に耕作者の運命を左右させないという、かつまた、唯一の商品の相場に決して意のままにされないで、常に、幾つもの収穫の全体によって利益をあげるというような情況に置くという、量り知れない位に大きい長所をもっている。

牧草地は両県では比較的貧弱な面積しか占めていない。アルザスの耕作者たちは、けれども、その飼料生産量を驚くほどふやすことが出来た。その土壌と気候がそれに適していた。収穫の直後に、小麦とライ麦の切株は軽い耕耘によって裏返しにされる。土地は、その際に、半量の堆肥ないし液肥の灌水をうけ、蕪の種子をバラ蒔きされる。この蕪は、夏の雨と8、9、10月の高い気温の影響をうけて遅滞なく成長し、冬の大部分の間、この唯一の家畜飼料を提供してくれる。このようにして、数千ヘクタールの耕地が年々牧草地に付け加わる。バー・ラン県ではその数量は20,000と数えられているが、オー・ラン県は、バー・ラン県に較べると、こうした間作蕪をずっと少なくしか栽培

しない。この注目すべきやり方は、アルザスでは極めて遠い以前から存在している。このやり方は、おそらくこの州から低地諸国に伝わって行ったのであり、そしてさらにこのオランダから、英国人は、グレート・ブリテンにおける家畜の改良とその農業の繁栄との起源であったこうした見事な蕪の栽培を、彼らの国に導入したのである。

アルザスは家畜に富んだ国ではないし、その点にこそその弱い側面がある。この国では僅かの家畜しか育てられていない。

馬は背が低く、商業に僅かの資源しか提供しない。それでも軍隊が、若干頭数の軽騎兵用馬をこの地方から徴募している。賞讃すべき努力がヴィサンブル郡における馬種改良のために行なわれた。農業は、ライン河沿いのこの両県において、モット力の強い馬、犁の牽引上必要とされる家畜の数を減らせるように、モット背が高く、モット力の強い牝馬を求めている、ということを指摘しておくべきである。

牛はアルザスでは最も普及している。それは大部分がスイス種に属する。両県の牛の頭数は兎も角もかなりに大きい数である。一方でバー・ラン県が耕地100ヘクタール当りに64頭の牛を数え、そしてオー・ラン県が53頭を数えるのに、イギリスは38頭でしかないということが、最も新しい統計を比較して確認されるには少なからず驚かされる。けれども、この優越性は外見だけである。イギリスの牛は全部が乳牛や肉牛から構成されている。アルザスでは、それに反して、家畜の相当な部分、おそらく1/4が、役畜として飼われている。最後に、イギリスの牛の2頭がアルザスのその3頭分の値打ちがあると評価できる。いやそれ以上のことがある。イギリスは、そうした牛のほか、耕地及び牧草地100ヘクタール当りに168頭の羊を飼っているが、バー・ラン県は17頭、オー・ラン県は20頭にすぎないし、さらになおこの羊がイギリスの羊よりも目方が軽い。海の向うのわが隣国のこうした優越性は何が原因なのか？ その耕作組織にか？ 彼らの能力にか？ 疑いもなく、そこには彼ら

の技術が相当大きな役割を占めている。然し、彼らがその牧草と多数の家畜を飼ったりそれを改良したりする可能性とを負うのは、とりわけ彼らの国の湿潤な氣候、彼らの国の土地の性質、彼らの国の濃霧にである。アルザスは同じような条件をもっていないし、他のすべての条件が等しいなら彼らもイギリス人と全く同じようにやるだろうと主張しても、アルザスの農業者たちの能力を臆測しすぎるとは信じられない。然し、乾燥して年間の大部分を通じて焼けつくような氣候、土地の軽く滲透性の強い性質が、この地方では草質の植物に恵みを与えない。家畜は、同様の条件では元気づかない。アルザスの農業者は、栽培牧草地の助けをかりて、彼らの放牧地の不足を部分的に補うことを試みた。彼らは、休閑地をいわば我物とし、彼らの家畜を増やした。然し、こんなやり方には限界がある。同じ理由から、彼らは、特別の牧場を必要とする肥育に熱中することは出来なかったし、こうした条件によって余儀なくされた牛乳の生産に従事している。けれども、大掛りの改良計画が、われわれが後で見るように、すぐれた河川の利用によって、こうした情況

を変えるべく今後実現を予定されている。

羊は、その消滅をそれ以外の諸原因に負っている。なぜなら、それは年毎に減少しており、羊の頭数はきわめて貧弱なものになっているからである。その責めは土地所有の過度の細分化と集約作物や工業用作物の発達とに帰せねばならない。きわめて細分化され、きわめて値の高い土地をもってしては、羊は、見張りの困難な、管理に費用のかかるものになる。それは大規模の入会地、広大な耕圃の動物である。……

……〔以下省略〕……

(V) 耕作の粗生産高

……〔全文省略〕……

(VI) 純生産高と生産費

…〔前文省略〕……

それぞれの作物の人手による作業を綿密に評価すると、アルザス農業によって賃金（賄い費を含む）として支払われた額は、年当り7,000万フランを下廻ることはなかった。この費用は、バー・ラン県の場合、生

人口表（1861年の人口調査）

	バー・ラン県	オー・ラン県
その所有地を経営する土地所有者、戸主(男、女)	66,007	41,068
管理人、奉公人頭、等	64	278
小作農	868	960
日雇農業及び農業労働者、戸主	37,817	29,494
各種職種、野菜栽培者、戸主	2,592	8,405
男女の年雇、料理女、等	15,317	10,687
所有地を経営する土地所有者と共に生活する子供と親族	92,418	75,548
管理人と共に生活する子供と親族	137	653
戸主である日雇農と共に生活する子供と親族	61,622	51,703
農業で生活する人口の総計	276,842	218,796
それ以外の人口の配分		
工業人口	196,364	226,904
商業人口	23,951	20,861
農、工、商業に付随する各種人口	3,113	2,685
自由職業人口	26,183	22,202
各種人口及び軍隊	32,720	19,586
計	282,331	292,238

産的な地面（耕地，牧草地，ぶどう園，放牧地，および林地）の1ヘクタール当りに99フラン，森林を除いたヘクタール当りには133フランにあたる。オー・ラン県の場合には，賃金は，第1の場合には70フラン50サンチームであり，固有の意味での農業によって経営される地面だけを取上げた第2の場合には，103フラン90サンチームになる。粗生産高の中から賃金として控除される部分は，それは粗生産高の1/3以上（36%）にあたるわけだから，著しく大きいことになる。それは，経済学者たちによって総面積のヘクタール当り50フランと見積られているイギリスにおける場合よりも，大幅に高い。さらにまた，それが60フラン以上には見積られえないザクセンにおけるよりも，ずっと高い。アルザス農業によるこうした他に比較して大きい労賃支出は，ある程度までは，多くの労働力を必要とする工業用作物やぶどう園の重要性によって説明がつく。他方で，イギリスにおいて支配的な地位を占めている家畜放牧は，労働力を殆んど必要としないからである。最も進んだ農業は最も大きな賃金額を支払う能力のある農業であると言われた。不幸にも，アルザスがこうした関係においてもっていると思われる優越性は，費用の分析をやってみると姿を消す。今述べられたばかりの命題が正しいものでありうるためには，事実，労働力のための支出が完全に利用され，きわめて生産的であり，生きた力の損失が全くないことが必要である。そして，アルザスの場合はそうではない。

農村人口は，わがライン河沿いの両県において，総人口の半分と数えられている。バー・ラン県では，100ヘクタールの耕作の賃金で生活している人が66人いる。オー・ラン県では，工業の発達のお蔭げでその割合はそれより低い，それでもなお，100ヘクタール当りに55人である。これはイギリスやザクセンの殆んど2倍である。イギリスは100ヘクタール当りに30人，ザクセンは37人しか使用しておらず，農村人口は総人口の1/4にすぎない（ザクセンで28%，イギリスで23%）。

このことから，イギリス農業が農村労働者に支払う賃金を100フランとすると，ザクセンでのそれに対応する金額は97フランになる。バー・ラン県ではそれは90フランであり，オー・ラン県では76フランになる。かくしてアルザス農業は，1/5ないし1/6だけ多い生産をあげるために2倍の労賃を支出しており，農業を職業として生きているそれぞれの個人当りの賃金の分け前は，ずっと少ないことになる。このことから必然的に，アルザスではイギリスやザクセンにおけるよりも，人手の利用の仕方が劣っており，そこでは人手の多大の損失があり，したがって，労働の生産性はヨリ低い，と結論せざるをえない。

わがライン河沿いの両県における賃金額は，こうした結論を完全に正当づける。労賃は，男の場合，賄い付きで70サンチームから1フラン25サンチーム，賄いなしで1フラン50サンチームから2フランであり，平均して1フラン80サンチームである。農場年雇（les valets de ferme）は，年当りに150フランから300フラン以上である。女は100フランから180フランの年給金を受取る。そして，こうした値段は昔と同じと信じてはいけぬ。それは，他の到る処におけると同様に，ここでも，最近30年間に40ないし33%の騰貴を蒙った。けれども，フランスの大部分の県のそれと比較すると，その騰貴ぶりは，なんと云っても低いと云えよう。それにも拘わらず，取り入れ期におけるロレーヌ地方からの草刈人夫や収穫人夫の出稼隊の到着にも拘わらず，また上記の個所で指摘した農村人口の過剰にも拘わらず，すべての陳述が農村における働き手の少なさを概く点で一致している。農村は人口を減じている。農村には人が居なくなっている，と人々は言っている。

この最後の主張は，然し，絶対的に正確であるわけではない。農村人口は，都市のそれと同様に，年々，規則的に増加した。ただ，それは農村でのほうがヨリ少なく増加したにすぎない。それは，農業の発達，ヨリ集約的でヨリ多くの労働力を要求するようになった経営の需要，未懇地の開発や沼地の干拓による耕作地

面積の増加と同じようには増加しなかった。……〔以下省略〕……

(VII) 土地所有の構成

アルザス農業の特徴の1つは小土地所有の優越である。前章で指摘した諸々の不都合にも拘わらず、1つの顕著な事実が生じた。すなわち、農業の繁栄は、アルザスでは、土地所有が細分化するのと同じくして展開したのである。けれども、このように小土地所有をアルザスの農業的富をうむ主要かつ決定的な原因であると見做すことは、何らの異議なしにというわけではないし、このような考え方は、このあと直ぐに述べることになる諸々の反対を惹き起す。

両県内に170,000人から180,000人の土地所有者(原注3)が数えられる。この数は、130,000人の土地所有者しかもたないザクセン州より多いし、殆んどイギリス全体と同じ数である。ところで、林地や森林を含まない可耕地は560,000ヘクタールの面積であるので、家族当りに3ヘクタール20アールの平均になる。そして、農地からの粗収入の全体を1億9千万フランと見積れば、家族当りに1,000ないし1,100フラン、すべての農村人口(男、女、及び子供)の頭割りに約380フランになる。

可耕地の実際の配分は、全く当然のことだが、それとは全く違った結果を生ぜしめている。30ないし40ヘクタールの面積の農場がこの面積の殆んど1/5を占めている。これは既に相当に規模の大きい土地所有である。なぜなら、100ないし150ヘクタール、及びそ

(原注3) 1861年の人口調査によると、バー・ラン及びオー・ランの両県内に次のような人口がいた。

自らの所有地を耕作する、家族の首長である男女の土地所有者	107,075
管理人	342
小作農	1,828
家族の首長である日雇農及び農業労働者	67,311
家族の首長である野菜栽培業者	10,997
家族の首長である労働者の少くとも5/6は小土地片の所有者であると見做すことが出来る。	

れ以上の規模の土地所有には、きわめて稀にしか遭遇しないからである。残余の可耕地は、その平均面積が7アールから4ヘクタールの間にある諸々の土地所有の間に配分されている。バー・ラン県では、土地の分割は隣県におけるよりもずっと激しい。支配的な経営は、1つの家族を占め4ヘクタール以下で構成されている経営である。この種の経営が領域全体の70%を占めている。4ヘクタールから7ヘクタールのそれが25%を占めている。7ヘクタール以上のそれは、面積の5%以上を占めていない。

最も規模の大きい土地所有の平均収入は5,000ないし8,000フランと評価できる。その他のものについては、収入は1,200から3,000フランの間である。4ヘクタールの面積の土地は主としてストラスブール周辺にかなり普及しており、この種の所有地が家族を養うのに与えてくれる収入は、1,400フランと評価された。15,000フランや20,000フランもの地代をもたらす土地財産に関して言えば、それは全く例外的な存在である。したがって、実を言えば2つのカテゴリの土地所有、すなわち、中及び小の土地所有しか存在しないことになる。

アルザスにおける土地所有の一般の状態について、(訳注3)数字的に、そしてとりわけコット・フォンシエールの額によって、もっと良く判断できよう。但し、道理至極にも認められているように、この数字は土地所有者数を正確に指示することから程遠いという注釈付きでだが。すなわち、バー・ラン県内の277,000のコット・フォンシエールのうち、1フラン以下のそれが67,589、1フランから5フランのものが93,630、5フランから10フランのものが40,000であり、僅かに5,000だけが100フラン以上である。

オー・ラン県の場合には、174,000コットのうち、100フラン以下が100,000、50フランから10フランが52,000である。100フラン以上は3,200しかない。

(訳注3) コット・フォンシエールに関しては、本誌第43巻第1号所載資料、「土地所有権の細分——退職直接税局長ジメル氏による1883年4月4日の講演——」を参照せよ。

これらの数字は、殆んどそれだけででも、土地所有の細分化がどの点まで進んでいるかを評価することを十分に可能にするだろう。この県以上に進んでいる県は他に1つも存在しない。そのうえに、そしてそこからこそ弊害が始まるのだが、所有地は、その規模のいかに問わず、唯一人の経営者によって耕作されているということが殆んどない。殆んど全部の経営は、貧弱な面積の、郊外地区に散在した、しばしば、相互に極めて遠く離れた地点に位置する、幾つもの地片(parcelle)から構成されている。パー・ラン県内の地片数は200万であり、耕作地区におけるその平均的な面積は12アールである。オー・ラン県には1,600,000以上の地片がある。おそらく、土地の粉碎をこれ以上に激しく押し進めることは困難であろう。

こうした情況は、そしてこのことは十分に認められておかねばならないが、新しいものではない。土地所有への嗜好はアルザスでは古くからのものであり、農村世襲地の平等分割の慣習が、ここでは、多くの地点で、民法典に先んじて存在していた。

(訳注4) 年貢明細帳(les livres terriers)を調べると、1789年のずっと以前に、極めて多数の市町村において、5アールの、いや2アールさえもの地片が幾百も見出されるし、アルザスの知事宛に提出されたある報告書は、18世紀に、相続地はその時代には平等な風に再分割されていたこと、及び、各人がその全部について分け前を貰うことを望むので、地片は際限もなく分割され、止めどもなく再分割されていたことを、確認している。

こうした極端な土地分割は、まず第一には、アルザスの人々の土地所有に対する謂わば生来の嗜好にその原理をもつものであったということは、誰にもわかる。同じくまた、例えば、ライン河とヴォージュ山脈とに挟まれた平野に密集した人口の益々激しくなる増

加、資本の分割、及び、アルザスでは早い時期から支配的であり、疑いもなく相続地の平等分割の慣習の採用と無縁ではなかったと思われる民主主義的精神、といったようなその他の諸原因によって説明することもまた、求められてきた。コルマルに置かれていたアルザスの最高法院(le conseil souverain)^(訳注5)によって1737年1月21日に裁判されたある訴訟の論議は、以上のようなものに付け加えるべきものとして、さらにもう1つの理由を指示するだろう。その重要性はおそらく副次的であろうが、その文書それ自体は、この時代における土地所有状態に真の照明を投じている。

この文書は云う、《それぞれの耕圃内の土地は、土地の肥沃さのゆえに、きわめて零細な諸部分に分割されている。あるものは3/4アルパンの小片しかもたない。あるものは1/2アルパン、1/4アルパン、いや1/8アルパンの小地片でしかないものさえある。もしも住民たちの申出が行なわれるなら、これらの零細な小地片は、作柄の劣った年次には、しばしば十分の一税の免除を認定されるだろう。そして住民たちは、十分の一税徴収官をガッカリさせることになるのだが、どの土地所有者も隣接した諸地片からなる畑を持っておらず、どの地片も大きな面積を持っていないようにすることに、大きな用心を払うだろう。こうしたことは、家族間での分割によって増加せしめられた分割や、十分の一税を脱税する目的で彼らの世襲地を細分化したり、そのように細分された地片相互をバラバラに切り離したりすることを目的にした彼ら相互間での物々交換、売却、及び交換やによって、住民たちが既に昔から実行している事柄である。》

こうした傾向は、民法典の影響下に、明らかに継続するほかはなかった。細分化の発達は、新しい相続制

(訳注4) ラールス百科辞典によると、livre terrierとは、「領主制諸税の列挙を収録した帳簿であり、時効を避けるために20年ないし30年毎に作り直されるのを慣例とした」とある。

(訳注5) 普通の州では高等法院(parlement)と呼ばれるもの。新しくフランス王国領となった諸州に17世紀及び18世紀に設置されたものだが、アルザス、アルトワ、ルーション、及びコルシカのそれは、1790年までこの名称を残した。

度の、厳格な原則として樹立された分割の平等の、共有から脱出させるべきを絶対的権利の、そしてとりわけ、その本性上不動産であるものの分割の、結果である筈である。

この時代以降、分割がどの程度に押し進められてきたかを理解するために、地片の変遷を土地原簿(註6)(les matrices cadastrales)の中に辿らねばならない。例えば、20アールの広さをもつ1地片が、40年間に、最初は2つに分割され、次いでこの2つの部分のそれぞれが、共同相続者間の取分の形式を単純化するために、1つは1/3に、他の1つは1/5に再分割されたし、さらに、これらの諸地片の多数が、3度目の相続の際にもう一度分割されたことが確認されるだろう。

けれども、たとえ所有地の分割が世紀初め以降一貫して発達したとしても、そして、たとえ行政当局が、パー・ラン県では、所有地の取得者数が売却者数を毎年24%も上廻っていることを論証できたとしても、細分化は、あらゆる地点で同じ激しさや同じ性格を伴って表明されたわけでは決してないし、ある種の限界が見出されないわけではないことを指摘するのが適当である。

まず始めに、もしも地片数が決して増加を止めなかったとしても、それらの地片の極めて多数は未墾地や森林やの開墾を犠牲にして創出されたということを、一般的に、認めねばならない。パー・ラン県だけでも、個人及び市町村に所属する170,000ヘクタールの土地が、過去50年以降に耕地化されたことを見落してはならない。

他方、若干の地域では、細分化は完全に停滞したままに留まっている。事実、かなり多数の市町村の地籍図や土地台帳を検討してみると、所有地の分割が、そう

した書類が作成された当時の状態のままに、謂わば何の変更も蒙らないままになっていることが明らかにされる。他の多くの地域では、軽微な変化しか確認されない。以上のようなすべてを考え合せると、これらの諸地方では、分割は既にそのギリギリの限界にまで到達しているということ、ないしは、分割が、経営の性質や耕作方法の種別やの中に、法律的作用以上に強力で、固疾化した傾向を上廻るほどに強力な、ある障害物に逢着しているのだと信じざるをえない。

例えば、経営が一般に、他から孤立して囲まれた、一種のまとまった土地集団(un certain corps de biens)からなっている河谷地方では、分割は稀である。分割はあまりに害がありすぎる。そこでは、遺産相続に際して、共同相続者たちは、殆んど常にその共有物の換価をおこない、土地は一括したまま売られる。

平原部の若干の地方や、例えばストラスブール周辺のように、経営が、上記の場合と同じように1つのコンパクトな一全体を形成し、特定作物の栽培を旨として構成されているような地域でも、事情は同じである。ぶどう園では、細分化は一般に2アールまでで止まるし、他方で牧草地や耕作地では、ギリギリの境界はほぼ10アールであるように思われる。

最後に、若干の地点では、細分化の発達は、ただ単に限界をもうけられたり停止されたりしているだけでなく、謂わば逆の方向への努力によって、換言すればヨリ目の詰まった農場(domains plus compactes)の再構成をめざす傾向によって、償なわれている。裕福の増加、工業の導入以降ヨリ豊富になった資本が、こうした事実を説明する。

けれども、所有地の分割が提示しているそうした様々な様相がどうであれ、そしてまた、それが逢着する可能性のある諸々の障害にも拘わらず、この世紀の初め以降のアルザス農業の発達を支配している事実が、土地所有者数の増加であるということは、やはり変りはない。

われわれは既に、土地を所有することへの嗜好が、

(訳注6) ラルス 百科辞典はいう、「matrice cadastrale は、宅地ではない所有地の地租に関係する。それは、地片の内訳とそれらの地片のそれぞれからの被課税収益とを土地所有者毎に指示する。この帳簿は、所有権移転の作業を通じて、毎年更新される。」

減退することから全く程遠く、時の経過と共に益々激しくなっているように思われる、と述べた。日雇農や工業労働者さえもが、土地を手に入れることに今まで以上に熱意を示しているし、多数の農地仲買人たちが投機的神情にかられて優越せしめた慣習、売りに出されたすべての土地集団を極めて零細な諸地片に分割し、その支払いにヨリ大きな容易さと長期の期限とを認めるといふ慣習が、こうした野望を激しくするのに少なからず貢献したことは明白である。同様にまた、あらゆる情況が、一致して労働者に土地所有権への接近を可能にするために現われた。少くとも若干の地方では、彼らは、工業によって支払われる高い賃金が彼らに可能にした貯蓄のお蔭で、土地取得に成功した。今日では、とりわけ、綿工業が重要な発達をとげた河谷地域では、土地を所有する労働者の数は著しく大きいし、このことはまさに、アルザス工業を際立たせる最も目立つ特徴の1つである。

こうした零細な土地所有者たちが、時として彼らの隣人の所有する繋駕の助力を得て、工業労働に捧げた時間の合間に彼らの土地を耕やしたり、自分の家族にそれらの土地を耕やさせたりするのが見られる。そして、一般に彼らは、彼らの零細な所有地を最も入念に取扱う。

奇妙な、そして注意を払うに値する出会いによって、土地所有というものがすべての人々にヨリ容易に接近可能なものになったのと同じ時期に、その時までには彼らの腕を雇って貰うことで満足していた日雇農や工業労働者たちが、不撓不屈の勤労と偉大なる貯蓄精神とによって、それとは分らぬうちにその身分を向上させ、彼らの境遇を改善させたその同じ時期に、逆の方向の運動が中土地所有階層の中に明らかになった。30ヘクタールから40ヘクタールまでを所有する、相当に規模の大きい土地所有者たち、農村貴族階層と呼ぶものものは、次第に益々困難なものになった。その多くの者たちが、余儀なくも、その所有地に多少とも負担の重い借金の重荷を担わせざるを得ない状況におかれた。また他の者たちは、その数はきわめ

て多いのだが、その所有地を地片毎に貸付けるはずと有利であることを知り、その所有地を直接に自ら経営することを断念した。

かくして、社会的階梯の最下段で農村人口が向上しつつあった時期に、それらの階層のすぐ上段にいた階層は下向しつつあった。この運動には多種多様な解釈がなされた。

数年前から、と言われているのだが、作用している経済的変革が、ある程度規模の大きい農村土地所有者たちを、全く特殊な条件下に置いた。彼らは、労働力の次第に益々激しくなる高価と減少とに対抗して戦わねばならなかった。他方で、交通運輸手段の増加と交換の容易さによる諸変革の結果として、彼らは、彼らの耕作の組織の中に、彼らがそれに適応する能力のない、ないしは適応することを欲しないような諸変化を要求した、全く新しい情況に当面せしめられた。それ以来、彼らの負担は増大し、かつまた、彼らの生産物は殆んど停滞したままに留まったので、彼らの利益は、一方で地代や地価が小土地所有の発展と発達とに比例して増加したその同じ時期に、減少した。彼らの困窮はその後益々大きくなっていかねばならなかった。

その力以上に支出するという、また、賃金は高く、時として儲けは大きくて手取り早いという工業の隣接地に位置している場合には、一種の福祉の競争に、いや時としては贅沢さえもの競争に引きずり込まれるという、ないしはさらに、その子供たちに費用のかかる教育を受けさせるという野望に誘惑されるという、耕作者たちの次第に益々明らかになってゆく傾向もまた、指摘されている。

小土地所有者は、それに反して、自分自身が提供する労働力に何の考慮も払わない。彼はずっとずっと大きい生産の成果をあげる。なぜなら彼は、多くの世話と人手による作業とを必要とする工業用作物に、一層多く従事できるからである。僅かの必要にしか迫られていないので、中土地所有が苦しめられているような困難や負担の大部分を免れている。

いずれにしても、一方のこうした上昇の歩み、他方のこうした一種の衰退は、それを法外に一般化すべきではないことを認めるとしても、社会的及び経済的見地からみて、軽視することの出来ない重要性を持っている。

この運動は、ある人々によっては不安をこめて見詰められているが、他の人々によっては、幸福な革命として謳歌されている。人々は、農村階級の次第に益々広汎な部分の土地所有権へのこうした接近の中に、プロレタリアートの、少くともそれが可能である限りにおいての消滅、を認めた。労働者たちは、次第に益々土地に結びつけられ、その利害に同一であると確認され、以後は必然的に保守主義者になり、土地所有権の鼓吹するすべての教化的な慣習を身につけるように、少しずつ導びかれてゆくだろう。

われわれは、こうした評価に異議を申立てる考えは些かもない。けれども、表明されている異説を前にしてこのことだけは述べておくべきである、この問題は殆んど常に間違った提起のされ方をしていると。分割の原理それ自体とその極端な結果とが、換言すれば行き過ぎた細分とが、あまりにも容易に混同されている。ないしはまた、土地所有権の細分 (la division de la propriété) と同じ土地所有者によって経営されている諸地片の散在 (la dispersion des parcelles) とが混同されている。

アルザス農業の発達に及ぼした小土地所有の好ましい影響は争いの余地がない。細分の起源がここでは如何に古いか指摘されている。この細分は、明らかに自然と土壤の性質とに結びついている。それは、今日ではアルザス精神の特徴的な表明を構成するほどまでのものになっているこの州の風習、習慣、社会的及び経済的構造、と同一視されている。

アルザスでは、小土地所有者こそ土地を最も大切に取扱う人間であるということを、すなわち、彼らはその土地の経営者であると同時に所有者でもあるので、限られた空間に彼らの一切の努力を集中し、彼らの所有地に役立つ物であれば何一つとして無駄に

失うことはないし、しばしば彼らだけが、若干の種類 of 作物に、それらの作物の栽培上要求される一切の世話を、真に経済的条件の中で与えることが出来る、ということを確認するには、目を自分の周囲に投じるだけで充分である。

けれども、土地所有権の細分が、アルザスでは農業的進歩に役立っているとしても、この原理に由来する極端な諸結果もまた同様でありうるわけではない。同一の土地所有者によって経営されている諸地片の散在は、殆んどすべての農場用建築物が人口の密集している村落内に寄せ集められていることと一緒にあって、今日では、この州の農業が克服しなければならない最も重大な障害の1つを構成している。……〔以下省略〕……

(VIII) アルザスにおける農村生活

……〔全文省略〕……

(IX) 市場

……〔前文省略〕……

綿工業がその生産額、その労働者数及びその賃金の総額を2倍ないし3倍にしたその同じ期間、すなわち1830年から1860年にかけての期間内に、土地の地代はヘクタール当りに75ないし100フランから100ないし150フランに騰貴したし、この騰貴は、とりわけ工業地方において目立っていた。けれども、工業の発達がアルザス農業の状況に強力に反作用を与えたのは、ただ単に市場の拡大にのみよるのではない。

綿工業は、そのこの州内への配備のされ方によって、われわれが既にそのことに関して述べる機会をもったように、その極めて多数の労働者を農村から徴募した。そして人々は、工業賃金の騰貴と、それによって実現可能になった貯蓄が、労働者たちに、彼らの野心の絶えざる目標である土地所有への接近を、如何に容易にしたかをみた。工業によって創り出された資本は、かくして、2つの異った形式の下に土地にむかって逆流した。そして、労働者たちの野心は工場主たち

によっても共にされたことを指摘されねばならない。アルザスの最も有力な工場主たちは、また大規模の土地所有農業者(*grands propriétaires agriculteurs*)でもある。彼らは、工業で稼いだ財産の一部分を土地の購入にあてることに執着した。彼らのうちの多数が、工業という競技場で彼らに恵まれた成功を農業という事業でも追い求める考えに惹きつけられた。Altkirch 所在の Jourdain 氏の農場、Ollwiller 所在の Gros 氏の見事な農場を、アルザスでは誰でも知っている。……〔以下省略〕……

(X) 水の利用について

……〔全文省略〕……

(XI) 信 用

……〔前文省略〕……

われわれは、これまでのところ、ユダヤ人のブローカーたちをある1つの側面からだけ考察してきた。然し、彼らのそうした概かわしいやり方が、一般的であるとか、何の埋め合せを伴うものでもないとか、考えさせるのは正当ではない。農村労働者である日雇農たちの間に現われている上昇運動、すなわち、われわれが先に既に述べておいた運動の中で、ユダヤ教徒が演じている重要な役割を無視するわけにはいかない。日雇農たちの多くに土地所有への接近を容易にさせたのは、何の疑問もなく、彼らユダヤ人たちの関与である。それらの日雇農たちは、その大部分がきわめて貧乏であり、きわめて長期の猶予を求めることを余儀なくされており、その支払をきわめて不規則的にしか遂行しないので、それを彼らの零細な経営に合体させたり、幾片かの小地片を買入れたりするのに必要になる資金を、探し出すことが出来ないだろう。

ユダヤ人ブローカーたちだけが、そうした条件に甘んじ、辛抱をし、幾度もの猶予を認め、そうすることによって彼らの債務者を、労働と節約の力を借りて、その土地を解放したり、土地所有者仲間に仲間入りしたり、することに成功させることが出来た。……〔以

下省略〕……

第 二 部

(XII) 穀物法の改正

……〔全文省略〕……

(XIII) 農業アンケートとその諸祈願

……〔前文省略〕……

諸陳述は、農村的階級の福祉及び教育におけるきわめて大きな改善を指摘することにおいて、その総てが一致している。農業日雇労働者がとりわけその恩恵に与っており、1つの喜ばしい傾向が、工業の労働者におけると同様に彼ら農業日雇労働者たちに関して指摘されている。すなわち、安定と道徳性との偉大な恩沢に浴している土地所有者になるという傾向である。然し、この絵には汚点が1つある。総ての陳述が、食事に対する諸要求に較べて、年雇 (*domestique*) たちの雇主に対する結び付きが少なくなっている为非難している。

賃金は過去30年以降少くとも50%は騰貴したし、人口の顕著な増加にも拘わらず、労働者は稀少になった。これは社会的進歩の不可避的な結果の1つである。バスティアはそのことを論証した。公的な富が増大する時、資本に帰属する部分は賃金となる部分に較べて大きさの少ない割合でしか増えない。すべての人々が進歩の利益と与り、どこでも福祉が増加するが、それは主として労働者の間で拡張する。ここにこそ、賃金増加の一般的理由がある。

労働者の需要は、資本の豊富と工業的活動との結果として、その供給よりも早い速度で増加する。したがって、賃金は騰貴せざるをえない。それは、農業に対しても、その他の産業に対してと同様に、どこでも騰貴せざるをえない。こうした事実は全ヨーロッパにおいて生じている。

もう1つの事実もまた、同じように全ヨーロッパにわたって明らかになっている。それは、次第に益々多

く、都市、そしてとりわけ、鉄道の幹線に接している都市、にむかって移動するという人口の傾向である。

人口の大中心地が享受している利便、それらの中心地をしてそれ以前に既に大中心地たらしめていた利便が、これらの都市がその標柱の役目を果している鉄道によって増加せしめられる、ということは（その名前はアルザスでも良く知られている、学識もあり謙譲でもある農学者ウージェーヌ・リスレル氏が、スイスにおける鉄道の経済的影響に関して公刊した有名な労作の中で行なっているように）、容易に証明できる。それらの都市に所在する工業は、以後、その原料を廉価で手に入れる。それは、その製造した生産物をより容易に売り捌く、それはより多くの利益を納める、そしてそれは、より自由に発展し、そのことがさらに、賃金の騰貴の傾向をもたらす。それらの工業は労働者たちに呼びかけをおこない、彼ら労働者たちは、自分たちの福祉を改善したいという正当な願望に従って、農村から都市にむかって馳せつける。……〔中略〕……

こうした諸原因に、さらに、その作用が上記の諸原因ほどには強力ではないもう1つの原因が加わる。人口は、フランスでは、もはや世紀初めにおけると同じ位に急速には増加しない。出生は家族の中で数を減らしている。他方、耕地面積は、より集約的でより工業的になった耕作がその労働力需要を著しく増加させているその同じ時期に、増加した。

日雇労働者のこうした稀少性は、年雇労働者 (ouvriers domestiques) を雇用しているすべての耕作者にとって身にこたえるし、それらの耕作者がより多数の年雇を雇用していればいるほど、それだけひどく身にこたえる。それはとりわけ、収穫期に感じさせられる。自分の農場の耕作に必要な一切の作業を、女房や子供と一緒に自分自身で行っている小規模の自作農には、それは殆んど重要性を持たないか全然重要性を持たない。ところで、この後の場合は、アルザスでは極めてしばしばであり、したがって、労働力の騰貴は、アルザスでは、ボース地方やブリ地方のような大規模

耕作の地方に較べると、農業生産にとって、身にこたえ方がずっと少ない。然しながらそれは、大規模及び中規模の所有地の経営費用を顕著に増加させている。

こうした情況にどんな対策をたてたら良いか？ 農業者は、こうした賃金の騰貴やこうした人手不足の、若干の地区では刈り取り人夫の不足のために既に収穫が危うくなるまでになっている人手不足の不都合を、どうしたら避けることが出来るか？ それは、大部分の陳述が要求しているように、労働者手帳に関する1854年6月22日の法律の規定を農業労働者に適用することによってであるか？ この方法は、この法律の効果を最も良く評価することの出来た人々の証言によれば、全く問題にならない。

それとも、若干の人々が考えたように、農村地域への居住により多くの魅力を与えるために、地方税の免除を拡張することによってか？ この方法もまた疑問である。

農業生産に従事する労働者の数の増加を懇願し熱望すべきであるのか？ この報告書の第一部 (63頁) で述べられた諸考察が、こうした願望に答えている。すなわち、農業が熱心に懇望すべき事柄は、消費者数の増加である。農業は、このことはどんなに繰り返しても繰り返して過ぎるということはないのだが、充分な労働者をもっている。農業に不足しているものは、それが自由にしている人手を、それから最大の利用効果をひき出すために、適切に雇用するということである。事実、わが地方の農業の現在の構造をもってしては、多くの時間と労力とが無駄に費されていないか？ 多数の日雇労働者たちによって遂行されている作業のうちの多くが、機械によって有利に遂行しているのではないか？ フランス農業は、政府の奨励と地方的な助成制度とのお蔭で、その農業用具の改善のために、既に多くのことをなして遂げた。けれども、あらゆる方面からあがっている不満の訴えは、なお今後達成されるべき事柄が残されていることの表現である。農業は工業を模倣すべきである。……〔以下省略〕……